

「ハイデルベルク・ストラスブール派遣参加報告書」

京都大学文学部 2回 安藤百香

海外渡航が人生初だった私にとって、このヨーロッパでの研修で見たものや感じたことはすべてが新鮮だった。ヨーロッパに立ち並ぶ、絵画の一部を切り取ったような美しい西洋建築物から漂う、京都の和風建築とは全く違う「異国の伝統」に圧倒された。そして現地を歩き交う人々には、世界の最先端を歩いてきたというある種の余裕と誇りが感じられた。歴史も伝統も人々の生活も、何もかも日本とは違う環境が広がる現地では戸惑いを覚えることもあった。しかし、ハイデルベルクの街を歩いていた1人の女性に拙い英語で道を尋ねたとき、見知らぬ私に向けてくれたその笑顔は、国の壁など感じさせない温かさをもって今も脳裏に焼き付いている。

ストラスブール大学とハイデルベルク大学でのワークショップを無事に終えて迎えた研修最終日、私たちはハイデルベルク城を見学した。赤いレンガが一つ一つ積み上げられた城壁の横に立ち、空高く聳える城の頂上を見上げた時、この壮大な建造物を生み出した歴史的権威が存在したことがひしひしと感じられた。城を見学する中で、私は未だ傷つくことなく残っている部分より戦争によって倒壊した部分に目を引かれた。かつての時代を生きた人が、その魂を注いで建てた建物につけられた「傷跡」を見ることは、その時代や当時を生きた人々が受けた傷を、唯一目で見えて感じる術であると私は考える。このハイデルベルク城は、三十年戦争、プファルツ継承戦争などによる倒壊を経験してきた。戦争を経験していない私たちは、その残酷さや激しさは人伝いの情報によって想像することしかできない。しかし、このように当時のまま残された歴史的建造物は、この先歴史をより一次的情報に近いものとして残していく価値あるものだと感じた。ハイデルベルク城の倒壊部分を見たとき、私は「原爆ドーム」が脳裏に浮かんだ。原爆によって崩れ傾いた日本の世界遺産も、戦争を経験してきた人々と歴史の傷を象徴している点で、現代を生きる人々へ訴えかけるものは、このヨーロッパに誇る壮大な城と本質は何ら変わらないのかもしれない。

ハイデルベルク城の庭を歩いた後、城の中にある薬事博物館を見学した。棚に多くの薬草瓶が展示されているのを目にし、西洋でも現代のような万能な化学薬品が開発されていないころ、医療においては効用に合わせて数えきれないほど多くの薬草が薬として用いられていたと分かった。一部で展示されている入れ物の中を開けると、中身に薬草がしっかり入っており、どれも微妙に異なる独特な香りがした。また薬草だけでなく、窓の外に女性の姿の影が映る薬室が再現されていたり、キリストが薬剤師として描かれている絵が展示されていたりと、西洋美術の要素が取り入れられていたのも非常に興味深かった。

私はこの研修において、広い世界に出て異なる価値観を持った人々と交流する中で、自分の人生の選択肢の広さに希望を感じることができた。自分が抱いていた日々の小さな悩みも、視野を大きく持つことで広く受け入れる余裕ができた。国内にとどまらず、勇気をもって外の世界に足を踏み入れることで自分をもう一段階成長させることができると学ぶことができたこの研修は、私が今後の進路の選択をするうえで、海外も選択肢として考えるきっかけを作ってくれた。そして、今回のテーマである「エコロジー・スタディーズ」は、生態学や環境学の側面を考えると理系学問からのアプローチも多いが、人文社会学を学ぶ私たちは、今回のように様々な文系学問と結び付けながら問題を議論することで、1つ1つの問題にどう向き合っていくことが正しいのかを、より人々の生活文化に即した視点で見極めることができると感じた。

このプログラムを行うにあたり色々とお動いくださいました方々、現地で協力していただきました方々、このプログラムとともに参加した仲間にごこの上なく感謝しています。素晴らしい経験を、ありがとうございました。